

分かる 考える 伸びる 授業づくりの基礎・基本

～10のポイント～

目標と指導と評価の一体化を目指して



愛媛県イメージアップキャラクター
みきゃん

愛媛県総合教育センター

目次

ページ

ブックレット作成の趣旨と構成 1

授業改善のための10のチェックリスト 2

目標 分かる授業

授業づくりについて 3

1 「ねらいを明確に」ってどういうこと? 4

2 子どもの思考の流れに沿った単元構成って? 6

3 「授業のデザイン」ってどんなもの? 8

指導 考える授業

4 「適切な発問や指示」「構造的な板書」って? 10

5 「子どもの思いや考え」を引き出すには? 12

6 「考える力」ってどうすれば育つの? 14

7 「学習環境」の整備ってどういうこと? 16

評価 伸びる授業

8 ねらいと連動した「評価問題」って? 18

9 個に応じた指導に評価をどう生かせばいいの? 20

10 「家庭学習の充実」を図るにはどうすればいいの? 22

参考資料 24

ブックレット作成の趣旨と構成

ブックレット作成の趣旨

愛媛県では、平成 24 年度から「愛媛県学力向上 5 か年計画」に基づき、“チーム愛媛”として、学校教育の質の保証・向上を図っているところです。

では、どのような授業を行えば、学力が向上するのでしょうか。

授業は、子どもと教師が共に創り、日々改善されていくものです。したがって、この授業が正しいとか、この授業でなければならないとかいうものはありません。しかし、多様な授業や教育方法にも、共通する基礎・基本があります。

本ブックレットは、この「基礎・基本」をまとめ、先生方に目指す授業のイメージを思い描いていただきたいと考えて作成したものです。授業改善に向けた自己研修や校内研修に、本ブックレットを御活用ください。

ブックレットの構成

本ブックレットは、平成 26 年度基礎研修（初任者研修、5 年経験者研修、10 年経験者研修）受講者が日頃感じている「授業づくり」に関する課題意識を踏まえて、作成しました。

愛媛県教育委員会作成の「愛媛教育の底力ー授業改善のための 10 のチェックリスト」を基に、「ねらいを明確にした『分かる』授業」「子ども主体の『考える』授業」「確かな見取りによる『伸びる』授業」の三つの章と 10 の項目でまとめています。

授業改善のための10のチェックリスト

目標と指導と評価の一体化を目指して

目標

ねらいを明確にした分かる授業

- 子どもの学習状況等を的確に把握し、単元や領域で身に付けさせたい学力や授業のねらいを明確にして分かりやすく提示している。
- 子どもの思考の流れに沿った単元構成を考え、単元や領域の指導計画や評価計画を立案している。
- 体験的な学習や問題解決的な学習を取り入れ、子どもたちが意欲的に学習に取り組むことができるよう、授業をデザインしている。

指導

子ども主体の考える授業

- 子どもの思考の流れが見える構造的な板書、子どもの思考を促す適切な発問や指示を行っている。
- 子どもの思いや考えを引き出すために、学習状況等に応じて臨機応変に対応している。
- 子どもの考えが深まるよう、「聞いて考える力」や「書いて考える力」の育成に重点を置いている。
- 学習活動と関連した掲示を行ったり、ICTを効果的に活用したりするなど、ねらいに沿った学習環境を整備している。

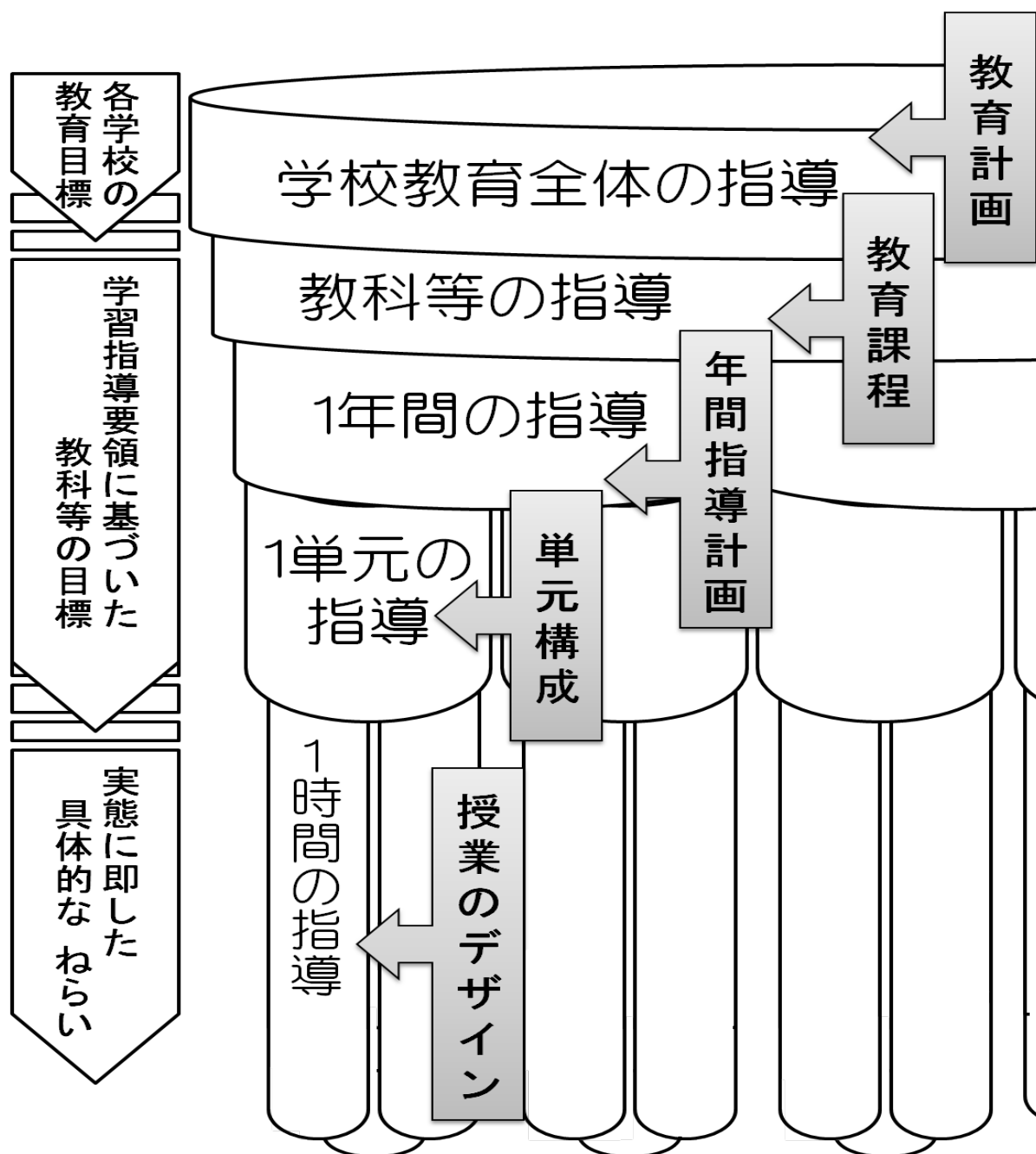
評価

確かな見取りによる伸びる授業

- ねらいと連動した評価問題を計画的に実施し、学力の定着状況の見届けを必ず行っている。
- 評価結果を生かして、授業中や授業後に個に応じた指導や支援を適切に行っている。
- 主体的に学ぶ態度を育成するために、学習課題を工夫し、保護者と連携しながら家庭学習の充実に努めている。

愛媛県教育委員会

授業づくりについて



各学校の教育目標は、学校教育全体の教育活動の成果が統合されてはじめて達成されるものです。そのため、各教科等の指導計画は、それぞれ固有の目標やねらいの実現を目指すとともに、他の教育活動との関連や学年間の関連を十分図るように作成される必要があります。

「分かる授業」の章では、各教科等の目標を実現させるための教材研究の在り方、単元構成の考え方と評価計画立案の意義、1時間の授業の組み立て方と留意事項を示し、授業を実施する前に、教師が行う基本的なことを、段階を追って解説しています。

1 「ねらいを明確に」ってどういうこと？



「ねらいを明確に」するため、学習課題を黒板に分かりやすく示しています。(初任者の声)

こうした方法によって、子どもは授業の「ねらい」を意識することができます。

では、教師は、子どもに示す「ねらい」をどのようにして決めればよいのでしょうか？

教科書の文章から引用する、指導書に書いていることを示す……、それでは、十分とは言えません。

「ねらいを明確に」するためには、学習指導要領に示された“教科等の目標や内容”と“子どもの実態”を踏まえて、「教材研究」を行うことが大切です。



参考「授業における学習を大きく左右するのは、子どもの取り組む教材である。教材とは、教育内容を子どもの学習のために具体化した素材である。」

(国立教育政策研究所「学習意欲向上のための総合的戦略に関する研究」)

教材研究の二つの視点

- 1 目標・内容に基づいて教材の本質を明らかにする。
- 2 子どもの立場から教材の意味を検討する。

【目標・内容に基づいた教材研究】

- ① 学習指導要領に示された教科等の目標や内容を把握する。
- ② 単元で育てたい資質や能力の系統的な位置付けを明確にする。
- ③ 単元の目標を具体的に分析し、教師は何を教え、子どもたちが何を分かり、何ができて、何に気付けばよいのかという指導内容を明らかにする。
- ④ 単元で扱う教材には、どのような特色があるのか、単元の目標を達成するためにどのような働きがあるのかを分析する。

【子どもの立場から考える教材研究】

- ① 子どもが興味・関心を向ける対象や、活動への思いや願い、これまでの体験や既に身に付けている習慣や技能等を把握する。
- ② 子どもが、今行っている学習が自分にとってどのような意味があるのかを意識できるように、子どもの身近な生活と結び付けて教材を検討する。
- ③ 一人一人の姿をイメージしながら、子どもが教材をどのように解釈するか綿密に予想する。

2 子どもの思考の流れに沿った単元構成って？



どのようにすれば、子どもの思考の流れに沿った単元が構成できるかを知りたいです。(5年経験者の声)

まず、教材研究を基に、この単元でどのような資質や能力、態度を身に付けさせたいかを明らかにし、単元目標を設定します。そして、その目標が実現されるように、具体的な指導や評価の計画を立てます。

教材研究で明らかになった指導内容に基づき、子どもの実態を把握した上で、単元を構成することが重要です。



指導内容に基づいた子どもの実態把握

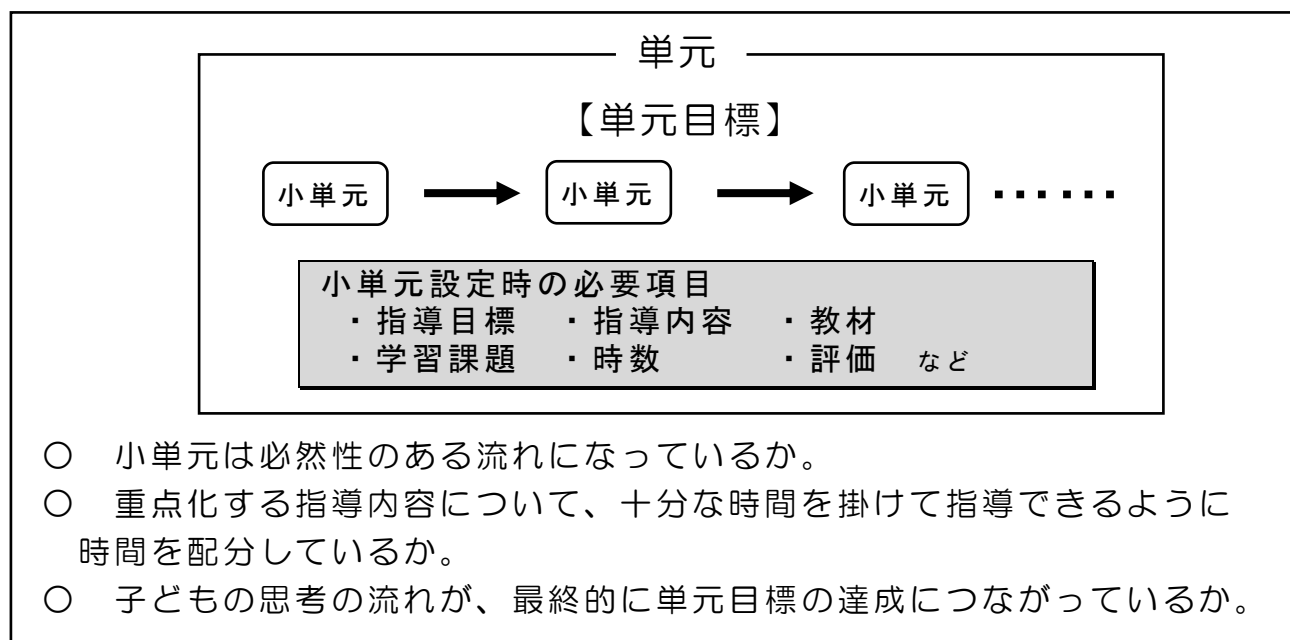
子どもの何をどう把握すればよいか曖昧になり、「明るく元気で、男女の仲がよい。」など、生活上の実態や子ども同士の関係からの把握だけにとどまっていますか？

次のような視点を持って、子どもの学習状況を把握しましょう。

- 指導内容に関する一人一人の子どもの興味・関心や学習到達状況
- 学級において学習状況が不十分な指導内容とその原因

子どもの思考の流れに沿った単元構成と指導計画

単元目標の実現を目指して、指導内容を配列したり、時間を配分したりします。



子どもの学習状況を的確に把握するための評価計画

評価は、目標がどの程度まで実現されたかを子どもの学習状況から把握するものです。そして、その評価に基づいて、教師は指導の過程や評価方法を見直し、より効果的な指導が行えるよう工夫改善を図っていきます。これが、「目標と指導と評価の一体化」の考え方です。

Q. 何のために前もって評価計画を立案しておくのでしょうか？

A. 前もって計画しておくことで、効果的・効率的な評価ができます。

評価時期や評価方法を事前に計画しておくことにより、バランスよく総合的に判断することができます。評価すべき点を見落とししていないか確認するだけでなく、必要以上に評価機会を設けて多大な時間を要するような事態を防ぐことができます。

A. 小单元ごとに目指すべき学習状況における子どもの姿を具体的に想定し、評価規準として設定することで、教師の指導方法が明らかになります。

子どもの姿がイメージできると、単元・授業の構想も、より具体的になります。また、想定していなかった子どもの姿が現れた時には、教師の評価観そのものを改善する機会となります。

【評価規準の設定方法】

- ① 各観点に即して実現が期待される子どもの姿が、単元のどの場面のどのような学習活動において、どのように実現されるかをイメージする。
- ② 実現が期待される子どもの姿について、実際の学習活動の場面を想起しながら、「育てようとする資質や能力、態度」と「指導内容」に照らし合わせて具体的に記述する。

評価規準は、単元の学習活動に先立って、子どもに分かりやすく説明しましょう。そうすることによって、活動の方向性や目標が明確になり、子どもは、単元途中に学習活動の自己点検をしたり、単元終了時に自らの成長を実感したりすることができます。

参考：国立教育政策研究所『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』

単元構成及び指導計画・評価計画は、立案すれば終わりではありません。子どもの学習状況を的確に把握し、実践を通して工夫改善していくことが大切です。

3 「授業のデザイン」ってどんなもの？



自力で解決した後、小集団や全体で練り合う授業をしています。（5年経験者の声）

1時間の授業の中で、体験的活動を行ったり、自力解決や集団思考の時間を取り入れたりすることで、子どもたちは意欲的に学習に取り組みます。

では、教師は、どのように授業をデザインすればよいのでしょうか。

1時間の授業をデザインする上で大切なことは、まず単元目標の達成を目指した各時間のねらいを考えることです。それから、ねらいの実現に向けて指導内容に即した活動と、それに合った授業形態を組み立てます。

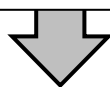


授業構想

1 1時間のねらいを基にして、まとめの段階の子どもの姿を想定する。

ねらいが実現された際に現れる子どもの姿を具体的に想定し、そこに至るまでに必要な活動を考える。

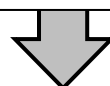
- ① 子どもが主体的に課題解決をするためのめあてを考える。
- ② めあてと整合性のある評価規準を考える。
- ③ 授業内容をまとめるキーワードを考える。



2 子どもの思考や反応を予想し、それに対応して活動を組み立てる。

子どもの思考のつながりが停滞しないよう、教師の手立てを考える。

- ① 子どもの思考や反応を予想する。
- ② 教えることと、考えさせることをはっきりさせる。
- ③ 「十分満足できる」状況（評価A）と「努力を要する」状況（評価C）にある子どもについての手立て、また、「おおむね満足できる」状況（評価B）にある子どもを、「十分満足できる」状況に高めるような手立てを考える。



3 子どもに見通しを持たせる方法と振り返らせる方法を決め、教師の働き掛けを明らかにし、子どもの学習意欲の向上を目指す。

子どもが問題意識を持ち、それが連続発展するような「見通し」、学習の意味や価値に気づき、自分の学びへの手応えを得られるような「振り返り」の場を作る。

＜見通しを持たせる方法（例）＞

- ・自分のめあてや目標を書かせたり、発表させたりする。
- ・予想した事柄や解決の方法を発表し合って確認させる。
- ・既習事項などから、関係する内容を見付けさせる。

＜振り返らせる方法（例）＞

- ・学習したことを文章化させる。
- ・練習問題（類似問題、発展問題等）に挑戦させる。
- ・授業を振り返り、自分ができるようになったことや、新たな課題を見付けさせる。

授業展開

	学習活動	留意点	確認してみよう！
導入	＜問題把握＞ ＜予想＞	・授業のねらいを明確に示す。 ・授業の見通しを持たせる。	<input type="checkbox"/> 具体的なねらいを板書しているか。 <input type="checkbox"/> 学習内容に興味を持たせているか。 <input type="checkbox"/> 問題を把握させているか。
展開	＜自力解決＞ ＜集団思考＞ ＜全体＞ 比較・検討	・個人や集団の考えを深めさせる。 ・適切な授業形態を工夫する。	<input type="checkbox"/> 自力解決の場面があるか。 <input type="checkbox"/> 集団思考の場面があるか。 <input type="checkbox"/> 適切な発問ができているか。 <input type="checkbox"/> 指導内容にふさわしい授業形態になっているか。
まとめ	＜集約＞ ＜振り返り＞ 考察 ＜発展＞	・授業のまとめを行う。 ・授業の振り返りを行う。	<input type="checkbox"/> ねらいが達成されているか。 <input type="checkbox"/> 適切な評価を行う場面があったか。 <input type="checkbox"/> 思考の流れが一目で分かる板書か。 <input type="checkbox"/> 指導内容の定着が図れているか。 <input type="checkbox"/> 次時へつなげているか。

子どもに身に付けさせたい力は何かという指導のねらいを押さえ、授業展開を考えましょう。また、子ども自身が学びの意味やその授業のねらいを見いだしているかを把握し、指導を振り返りましょう。

4 「適切な発問や指示」「構造的な板書」って？



指示は短く分かりやすくなるよう心掛けています。板書も子どもが整理しやすいよう構造化しています。(10年経験者の声)

このような指導によって、子どもは活動の手順が分かったり、学習内容の確認ができたりします。これは、学習場面に応じた指導技術と言えるでしょう。

さらに、授業全体を見通した指導を意識することで、子ども主体の授業となります。

授業全体の流れを考え、ねらいに向かう子どもの反応を予想しながら、事前に発問や板書の計画を立てることが大切です。



思考を促す発問や指示の計画

1 何のために発問するのかを明確にする。

【子どもの学習状況を把握するために】

学習内容をどの程度理解したのかを確認する。

- 「問題で聞かれていることは、何ですか。」
- 「ジュース1本とあめ1個の値段は、それぞれいくらですか。」

【子どもの思考を深めるために】

相互の意見を対比させ、共通点や相違点を見付けさせる。

- 「AさんとBさんの考え方の違うところはどこでしょう。」

互いの考えを整理し、関連に気付かせる。

- 「みんなの意見をまとめると、どんなことが分かりますか。」

根拠を問うことで、思考の過程に気付かせる。

- 「なぜ、Cさんの考えがよいと思ったのですか。」

「揺さぶる」ことで、知的好奇心を高める。

- 「この方法は、どんな時でも使えると思いますか。」

2 いつ、どんな発問や指示をするかを考える。

子どもたちの反応を予想し、発問や指示のタイミングを考えたり、学習のねらいに向けた活動となるように内容を考えたりする。

同じ内容を言い換えて問い直したり、一つ一つ指示がなければ活動できなかったりすると、子どもの思考や活動が停滞します。発問計画を立てる時には、次のことに気を付けましょう。

- 子どもが理解できるように簡潔、明瞭であること。
- 発問や指示が多くなりすぎないように精選すること。
- 発問や指示の後には、間を取り、子どもに考える時間を与えること。

授業に沿った思考の流れの見える板書

【例】 構造化

めあてからまとめに至る道筋が分かるようにしましょう。
(並びや位置の検討)

めあて	子どもの意見 ①	子どもの意見 ②	まとめ
問題・予想			練習

視覚的効果
ポイントには、黄色チョーク等を使って目立たせ、意識させましょう。

〇月〇日 (月)

めあて

いろいろな考え方でといてみよう。

問題

誕生日会をするので、
1本80円のジュースを 6本
1こ20円のあめを 6こ
買いました。
何円はらえばよいですか。

予想

○○○○○
○○○○○

① べつべつに ② 一人分をまとめて

Aさんの考え

Cさんの考え

Bさんの考え

Dさんの考え

まとめ

「一人分をまとめて」の考えの方が、計算がかんたんになる。

練習

スーパーで、1本 60円のキュウリ 5本と1こ 40円のトマト 5こを買いました。何円はらえばよいですか。

イラスト等を用いてイメージしやすくしましょう。

問題解決の手掛かり

ホワイトボードを効果的に用いて子どもの考えを集約し、ねらいに迫る過程を示しましょう。

思考の流れ

類似問題を示すことで、学習の振り返りをしましょう。

学習のまとめ

子どもの学習意欲を高めるノート指導

【例】

授業を振り返り、次時からの学習に生かせるように、必ず記入させましょう。

- ・学習日時
- ・めあて
- ・問題
- ・考え(自分・友達)
- ・まとめ 等

子どもの意欲を高められるように、ノートをチェックしたら、コメントや印等を必ず付けましょう。

<p>学習日時</p> <p>めあて</p> <p>問題</p> <p>自分の考え</p> <p>友達の考え</p>	<p>まとめ</p> <p>練習</p> <p>感想、自己評価</p>
--	-------------------------------------

学年の始めにノートの書き方を決め、子どもと確認しましょう。

新しい単元に入った時は、早い段階でノートを点検し、つまずきの早期発見に努めましょう。

発達段階に応じた系統的なノート指導を行うために、基本的な決まりについて教師同士で話し合い、共通理解を図りましょう。

授業の様子を画像や音声などに記録し、自分自身の発問、板書を見直しましょう。客観的な振り返りができ、授業改善に役立ちます。

5 「子どもの思いや考え」を引き出すには？



1時間の授業の中で、できるだけ多くの子どもが発表できるようにしています。（5年経験者の声）

子どもが進んで発表している授業では、友達との相互交流によって、自分の見方や考え方を広げたり深めたりすることができます。

では、子どもが主体的に「思いや考え」を表現するには、教師のどのような手立てが必要なのでしょう。

一人一人の子どもが自分の思いや考えを素直に表現できる場づくりと、子どもが自分の考えを形成する過程を大切にしたい授業づくりが大切です。



思いや考えを素直に表現できる場づくり

子どもが、伸び伸びと自己表現するには、自分が受け入れられている安心感を持っていることが大切です。次のような教師の姿勢を心掛けましょう。

- 子ども一人一人のよさを認める共感的な態度を示す。
- 教師自身が人との関わりを楽しみ、子どもと行動をともにする。
- 意志決定の場を設定し、自分の責任で行動できるように支援する。
- ※ 教師の子どもに対する姿そのもの（話し方、聞き方、接し方）が、モデルとなります。子ども一人一人を大切にしているかどうか、表情、言葉遣い、しぐさなど、自分の姿を自覚的に振り返りましょう。

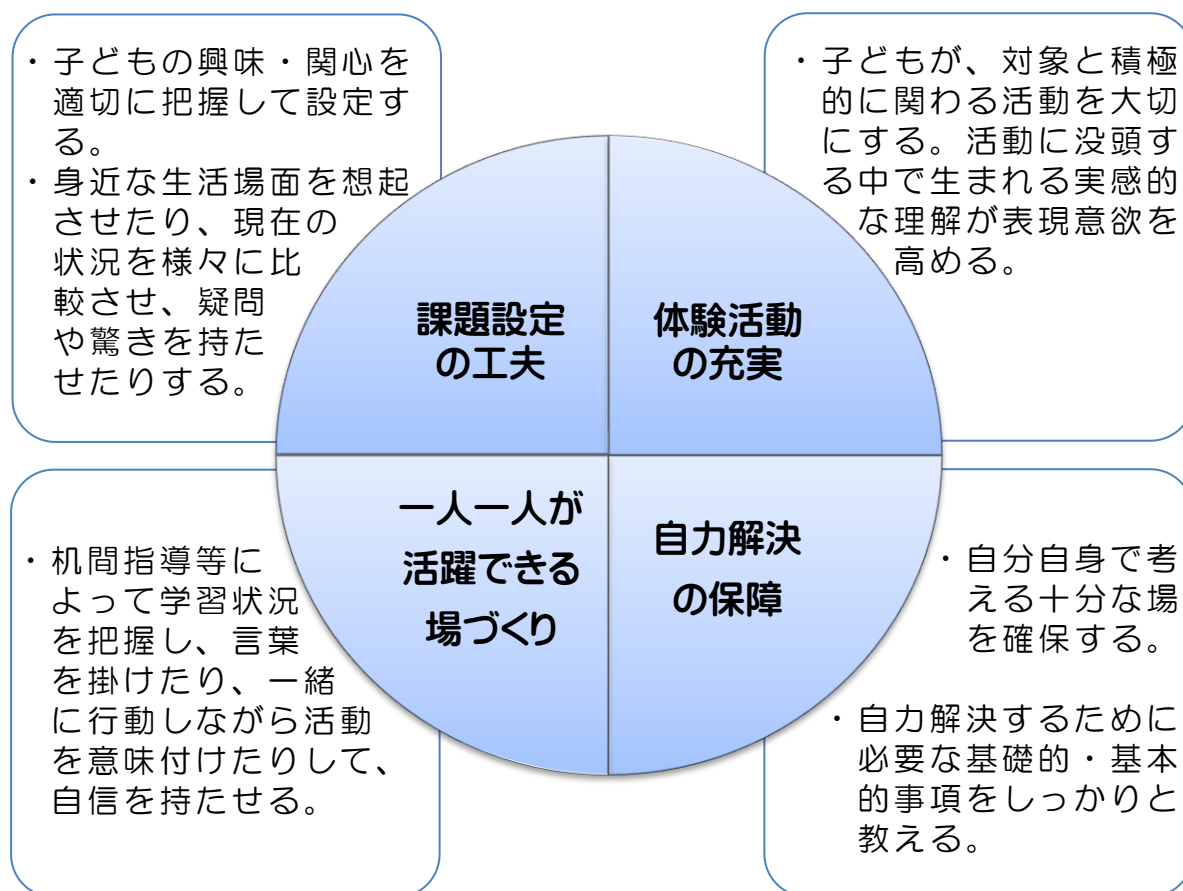
子ども同士の関係においても、相手の言葉に耳を傾けて理解しようとする気持ちを持っていることが必要です。聞く力を育てる指導を大切にしましょう。

- 相手に視線を向けたり、話にうなずいたりしながら聞く。
- 相手の話を最後まで聞く。
- 自分の思いや考えと比べ、共通点と相違点を見付けながら聞く。
- 分からないことを相手に尋ねて、理解を深めようと思いつきながら聞く。
- 相手の意図やよいところをつかみながら聞く。

互いを認め合う雰囲気を作られることで、子どもは自分の思いや考えを素直に表現することができます。そうした集団の中では、互いに高め合いながら学習することができます。

自分の考えを形成する過程を大切にしたい授業づくり

子ども自身が表現したくなるような、思いや考えを持たせましょう。



こんな子どもにはどう対応しますか…



<課題を理解できていない子ども>

黒板やノートに書いているめあてを確認させる。既習事項や日常体験と関連させて説明する。

<課題は理解できているが、課題解決の方法が分からない子ども>

課題解決に必要な資料や情報を提示し、情報活用の方法について例を示す。

<思いや考えをうまく表現できない子ども>

子どもの得意な表現方法があることを意識し、多様な表現活動（文字言語、音声言語、身体表現、絵や造形表現など）の場を作る。

教師が、子どもの思いや考え、感情に対して深い関心を持って対応することが大切です。共感的な子ども理解の力を高めましょう。

様々な手立てを考えて準備しておくからこそ、子どもの学習状況に応じて臨機応変に対応することができるのです。教師同士で、有効な手立てについて情報交換し、指導技術を磨きましょう。

6 「考える力」ってどうすれば育つの？



話し合い活動やペアでの活動を取り入れて、考えが深められるようにしています。(初任者の声)

話し合いの前提として、個人の考えがしっかりとあること、他の人の考えを聞きたくなっていることを意識しましょう。

学習内容に合わせて、効果的な学習形態(個人・小集団・学級全体等)を選択したり、話し合いの中で「考え」を視覚化したりすることで、思考の深まりや広がりが期待できます。



聞いて考える力の育成

子どもは、「聞くこと」、つまり他者と関わることで考えを深めたり広めたりします。また、話し合いには、自分の考えを持つことも必要です。指導内容や学習活動、子どもの実態に応じて、1時間の授業の中でも複数の学習形態を選択しましょう。一般的に、次のような形態があります。

一斉学習

○ 特長 △ 留意点

- 全体に共通の課題を投げ掛け、多くの考えを知り、集団で思考することができる。教師が子どもの反応を把握しやすい。
- △ 子どもが受け身になることもある。興味・関心を高める工夫をし、全員が考えることのできる課題を設定する必要がある。

小集団学習(グループ、ペア)

- 一人一人が話し合いに参加しやすく、互いの考えを深められる。それぞれの役割が明確になり、主体的な活動が期待できる。
- △ 学習への参加の姿に偏りが見られる場合もある。同質か異質か、少人数か多人数か等、意図を持ってグループ編成を行う。目的に応じた明確な指示をするとともに、必然性のある小集団学習となるように授業展開を工夫する。

個別学習

- 一人一人の能力や適性に応じて指導でき、自分のペースで考えることができる。
- △ 思考が広がったり、深まったりしにくい一面があるため、必要に応じて教師が新しい視点を投げ掛ける。個別学習後は、それぞれの考えが生かされるように授業を展開する。

書いて考える力の育成

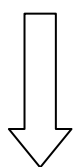
子どもは、書くことによって思いや考えを整理し、よりはっきりと自分の考えを自覚します。また、個々が頭に浮かんだことを書いて視覚化することにより、集団として思いや考えを共有し、更に思考を深めることもできます。

学習活動に応じて、ワークシート、ホワイトボード、付箋紙、模造紙、電子黒板などの準備をしましょう。

思考ツールの活用

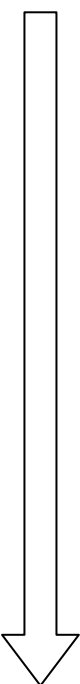
思考ツール(グラフィック・オーガナイザーともいいます。)を活用することで、話し合いや学び合いの過程が目に見える形で残り、子どもが学びを実感できます。

思考場面を設定する



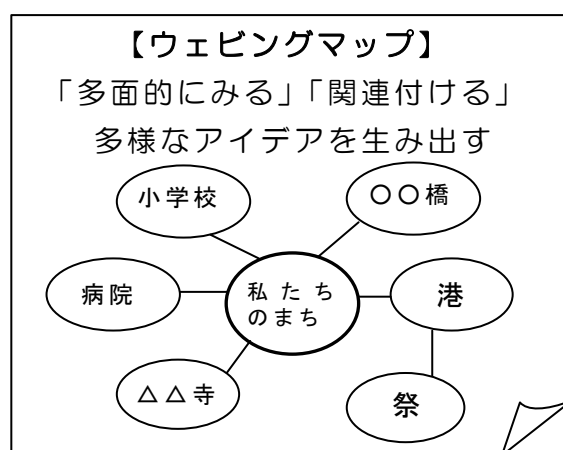
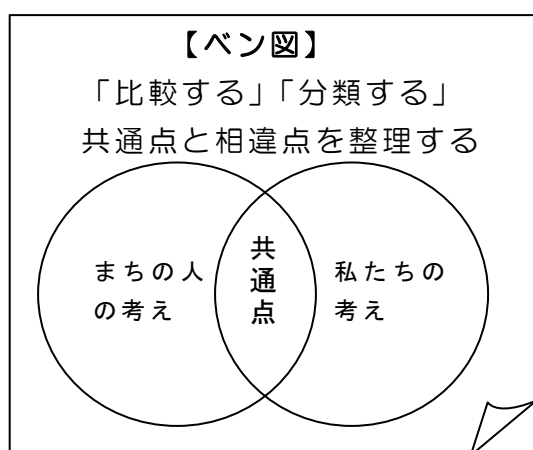
漠然と「考えましょう。」と指示するのではなく、「考えの共通点や相違点を見付けましょう。」「いろいろな立場から見ると、どのように感じるか考えましょう。」など、子どもに考える視点を与えましょう。そして、それぞれの思考場面で有効な思考ツールを用意しましょう。

情報や考えを視覚化させる



自分の考えを整理・分析するだけでなく、互いの考えを聞いたり操作したりしながら、新たな視点を得ることができます。

事前に、個々がどのような考えや情報を、どの程度持っているのか把握しておきましょう。



参考：文部科学省『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』

自分の意見を再度整理させる

友達と話し合った後、新たに生まれた気付きや意見を自分の中で再構成させましょう。

思考ツールは数多くあります。各学校で、必要なものを選び、様々な教科や内容の指導で活用しながら、考えを深める方法を検討しましょう。

7 「学習環境」の整備ってどういうこと？



いつも整理整頓に気を配っています。(初任者の声)

整った教室では、子どもも教師も気持ちよく一日を過ごすことができます。
学校生活の大半を過ごす教室は、こうした子どもの精神面だけでなく、学習面にも大きな影響を与えます。

「学習環境」の整備とは、教室環境を整理整頓するだけではなく、学習のねらいを意識し、子どもが自分から興味を持って学習に取り組むことができるように環境を整えることです。



学習意欲を高める工夫

1 安全で落ち着いた環境の整備

【安全で快適に過ごせる環境】

- ・机、椅子、ロッカー等の整理整頓、清掃等を確実に行う。
- ・画びょう、フックなど危険な物がないか、こまめに確認する。

【落ち着いた環境】

- ・教室前面は掲示物を特に厳選し、視覚的な刺激を減らす。
- ・掲示物をこまめに確認し、剥がれかけていれば直す。

2 計画的な環境の整備

- 単元に応じて、関連する図書を整備する、生き物を飼育する、関連する写真や物品を展示するなど興味・関心を持たせる工夫を行う。
- 子どもが制作した成果物や調べ学習の結果などをポスターにまとめて展示し、子どもたちに身に付けてほしいこと、話題にしてほしいことを示す。

3 学習展開に応じた環境の整備

子どもの学習状況に応じて、問題解決の手掛かりとなる資料コーナーを増設したり、前時までの学習過程を提示したりして、環境を再構成する。

授業改善のためのICT活用

ICT活用は、子どもの興味を引き出し、学力の定着に有効なことは、既に実証されています。ICTの効果的な活用で、次のようなことが期待できます。

1 指示・説明が明確になる

【教科書やワークシートなどを大きく映して説明】

実物投影機を用いて大きく提示した教材と、子どもの手元にあるものと同じなので、注目させる場所や書き込む場所、線を引く場所などを確実に指示できます。

【手元を大きく見せて説明】

算数で分度器の目盛の合わせ方や読み方を指導する、縫い物の手元の動きを見せる、書写で手本や筆の動きを見せるなどの使い方ができます。

2 興味・関心を喚起することができる

【優れたコンテンツの利用】

実際に行くことができない場所や時代をイメージさせることができます。

【フラッシュ教材の利用】

課題を次々に提示していくことで、授業に変化をつけることができます。

3 理解を深めることができる

【実技・技能の振り返り】

体育の実技や英語のスピーチなどのパフォーマンスを録画してすぐに見せ、説明しながら改善点を探ることができます。

【シミュレーションソフトを活用】

理科で惑星の運動と太陽の位置関係を理解させるなど、時間的・空間的に実験が難しいものでも、再現して考察することができます。

ICTを活用すると、子どもの意識が集中しやすく、教師の指示や説明に要する時間が短縮されます。そこで生まれた時間的余裕を、子どもの話合いや活動の時間に充てることができます。ICTが日常的に活用できるように環境を整えましょう。

ICT活用は授業改善のための有効な手段ですが、活用すること自体が目的ではありません。授業のねらいを達成するためのツールとして活用しましょう。

※ 文部科学省「学びのイノベーション事業実証研究報告書」が参考になります。

環境に教育的価値を含ませることで、主体的な子どもの学習を促しましょう。そのためには、子どもの身の回りの環境の持つ特性・特質について、日頃から意識しておくことが大切です。

8 ねらいと連動した「評価問題」って？



学力の定着状況を把握するために、毎学期末に漢字・計算テスト（50問）をしています。（10年経験者の声）

評価問題とは、子どもの学習到達状況や定着状況を確認するために、ねらいを明確にして作成・実施するペーパーテストやワークシート問題などのことです。学期末にまとめて、基礎的・基本的な知識・技能を問うテストを行うだけでなく、評価問題を適切に作成・活用して、子どもの学習到達状況や定着状況を把握することが大切です。

では、どのような評価問題を、どのようなタイミングで行えばよいのでしょうか？

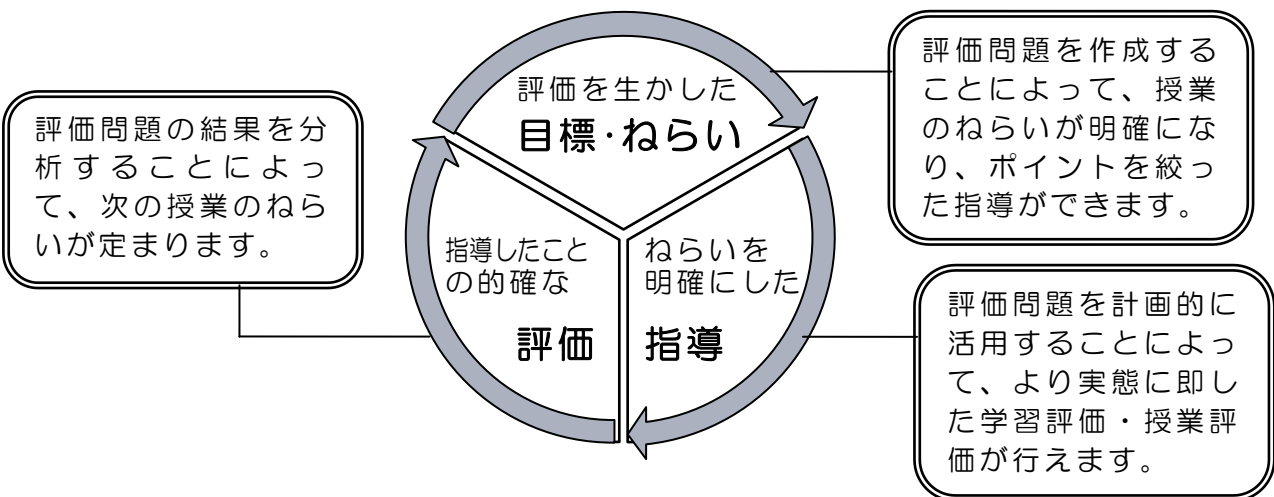
習得した知識・技能を生かして考え、答えることのできる問題等を、学習の過程において計画的に活用することが大切です。



ねらいと評価問題との連動

評価問題の効用

教育活動では、指導の計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されます。評価の結果から、次の指導計画を見直し、授業を改善することができます。



評価問題には、一問一答式のものや、授業での発問の答えや板書の内容がそのまま解答となるようなものだけでなく、習得した基礎的・基本的な知識・技能を生かすことによって解答することができる問題を設け、計画的に活用しましょう。

評価問題作成のポイント

- 単元の目標・授業のねらいと指導内容に基づき、作成する。
 [授業を実施する前に作成することによって、ねらいをより明確にして授業を行うことができます。]
- 記憶を問うだけのものにならないよう、子どもが授業で習得したことを生かして解ける問題を作成する。
 [解答の根拠や答えを導くプロセスを問い、それらを説明させる問題によって学習到達状況・定着状況をより実態に即して把握することができます。]
- 評価の観点別に作成するとともに、解答の評価規準を設定する。
 [問題のねらいを明確にし、解答に応じた手立てを考えるのに有効です。]
- 市販の評価問題プリント等を使用している場合には、目の前の子どもの実態に合わせて設問の補足作成をするなど、ねらいに即したものにします。

評価問題を活用した授業改善

評価問題に対する子どもの解答から、ねらいが達成されているかどうか、目標に即した力がどのくらい定着しているかを分析しましょう。そして、不十分であると認識された事項については、授業内容を振り返り、課題を明らかにして次時からの指導計画の見直しを行い、補充的な指導を含めた授業改善を図りましょう。

評価問題を活用する際のポイント

- ねらいに応じて、授業ごとや単元ごとに定期的・計画的に活用する。
- 評価問題の解答を分析し、子どもの学習到達状況・定着状況を把握する。
- 課題を明らかにし、子ども一人一人の状況に応じて指導する。
- 次の授業のねらいを明らかにし、授業を構築する。
 [学習到達状況・定着状況に即して子ども観を明確にし、次の授業のねらいを定めましょう。]

※ 国立教育政策研究所「授業アイデア例」、愛媛県教育委員会「学びの森」学習支援サイトが評価問題を生かした授業改善の参考になります。

評価問題の作成や課題の分析等を通し、教師自身が授業の振り返りをすることで、よりよい授業実践につながります。

9 個に応じた指導に評価をどう生かせばいいの？



小テストで子どもの理解度を把握し、授業後、再テストをしたり、個別の課題を出したりしています。(初任者の声)

学習前に評価したり(診断的評価)、学習後に評価したり(総括的評価)したことを基に、個別の対応を考えることに加え、学習過程での評価(形成的評価)を大切に、フィードバックすることで、子どものよさや可能性が更に伸びます。

個に応じた指導や支援では、多様な評価を子どもの学習状況の的確な把握に生かすことが大切です。



子どもの学習状況の的確な把握

子どもの学習状況の把握には、異なる方法や様々な評価者による多様な評価を組み合わせるとともに、評価を学習活動の終末だけでなく、事前や途中で位置付けて実施することを心掛けましょう。

<様々な評価方法>

○ 特長 △ 留意点

【観察による評価】

- 記述シートや完成した作品では読み取れない学習状況を見取ることができ、学習過程での子どもの変容を把握できます。また、即座に指導に生かせます。
- △ 評価の際には視点を明確にするようにしましょう。

【制作物による評価】

- 制作物に寄せた子どもの目の付けどころやこだわりなどを評価できます。
- △ 複数の情報から進歩の状況を的確に把握するようにしましょう。

【ポートフォリオを基にした評価】

- 子どもが主体的・計画的に記録等を集積したポートフォリオを評価することで、問題解決の過程や探究の過程を詳しく把握することができます。
- △ ただの集積物にならないよう、適宜資料の並べ替えや取捨選択をするなどの整理をさせ、自己の学習を見通し、振り返る機会を設けましょう。

【パフォーマンス評価】

- 一定の課題の中で身に付けた力を用いて活動する機会(発表やインタビュー、プレゼンテーション、レポートなど)を設定し、その力がどのように発揮されるかを評価することを通して、身に付いた力を見取ることができます。
- △ 「おおむね満足できる」状況(評価B)を具体的に設定し、子どもと共有しておきましょう。

個に応じた指導や支援の実践

形成的評価を生かし、個々に対応した指導をすることが大切です。

1 机間指導による個別支援

机間指導では、一人一人の学習や作業の進み具合を確認しながら、目標に対する評価をすると同時に、個に必要な支援や助言ができます。

- ねらいを持って机間指導を行い、気になる子ども、特に課題を抱える子どもへの対応をしましょう。
- 子どものつまずきを想定し、ヒントカードを何種類か用意するなど、個に応じた手立てを事前に考えておきましょう。
- 知識・技能だけでなく、意欲や態度等の情意面の変容にも目を向けましょう。
- 子どもの小さな変化を見付け、褒めることで自信を持たせましょう。

2 習熟度に応じた複数の問題プリントの作成

基礎・基本問題のプリントから応用・発展問題を含んだ問題を用意し、難易度の低いものから高いものへと順に取り組めるようにしましょう。このことにより、学力の定着が不十分な子どもは基礎・基本を固めることができ、習熟度の高い子どもは、思考力や応用力を高めることができます。

3 少人数指導／チーム・ティーチング

少人数指導やチーム・ティーチングは、子ども一人一人に応じた対応をするための効果的な指導形態の一つです。集団編成において、各集団が同質となるように分けるか、異質（習熟度別、課題別、学習方法別）となるように分けるかなど、様々な指導形態を教科の特性や子どもの実態に応じて使い分けたり、組み合わせたりしながら、個に応じた指導を進めることが大切です。

- 少人数指導においては、診断的評価を基に、どの教科の、どの単元で、どのような個人差に応じた学習に適應するか、よく検討しましょう。
- 習熟度別に少人数指導を行う場合には、子どもの心理的な面へ配慮するとともに、保護者の理解を得られるように説明しましょう。
- チーム・ティーチングでは、多くの視点から子どもの実態を把握することを心掛け、教師の専門性や特性を生かした創造的な授業を実践しましょう。

評価が変われば授業が変わり、子どもが育ちます。複数の評価者で評価について検討することで、教師自身の評価力を高めましょう。

10 「家庭学習の充実」を図るにはどうすればいいの？



家庭学習を充実させる方法や家庭との連携について知りたいです。（10年経験者の声）

家庭学習を充実させることは、学習習慣の定着を図り、学習内容を定着させるのに有効に働きます。そのことにより、主体的に学ぶ態度を育成することができます。

では、「家庭学習の充実」を図るため、教師はどうすればよいのでしょうか？

家庭学習の充実を図るには、授業と家庭学習を接続するために、課題の出し方や評価方法を工夫することが大切です。また、家庭学習に関する全教職員の共通理解や家庭への継続した協力依頼も重要です。



授業と家庭学習を接続する課題や評価方法の工夫

子どもが家庭でもっと学習したいと思う「分かる・楽しい授業」

授業

子どもの家庭学習での取組を生かすことを意識した授業

○ 課題の出し方の工夫	
同じ質・量の課題	例：漢字練習、音読 正しい書き方や読み方などのポイントを示す。
個人差に応じた質・量の課題	例：個に応じたプリント学習 自分の習熟度に合った課題を選択させる。
教師が示したものの中から自分で選択できる課題	例：新聞記事をまとめて発表 課題の取り組み方について、具体的に説明する。
自分で創意工夫できる課題（自主学习）	例：ことわざ調べと意味を説明するイラスト作成 ページ数や時間を指定する等、目安を示す。
○ 学習意欲の向上を図る評価の工夫	
課題の確認と適切なアドバイスやコメント	□小さなことも見逃さずにタイミングよく。 「楽しかったことが伝わってくる作文ですね。」
よい取組は具体的に褒めて紹介	□取組の過程での努力や工夫などを認める。 「最後まで丁寧に書けるようになりましたね。」
課題への取組の成果を実感できる評価問題	□課題の範囲から出題し、自信を持たせる。 「先週の宿題をよく頑張った成果ですね。」
課題への取組で見られた成長を保護者へ情報提供	□連絡帳や学級通信等で伝え、共通の話題にする。 「問題が速く正確に解けるようになりました。」

全教職員の共通理解・家庭との連携

全教職員の共通理解

- 家庭学習の意義や学校の方針について、全教職員で共通理解を図る。
- 学校全体で課題の出し方（質や量、教科間のバランス）や評価方法について話し合い、「家庭学習の手引」等を作成する。
- 家庭学習充実期間などを設け、学校全体で取り組む意識を高める。
- 教師同士が家庭学習について話し合う機会を持ち、効果的だった課題については情報を共有する。

家庭との連携

- 保護者が課題に関わる場面（音読の確認等）を意図的に入れることで、保護者に学校の学習に関心を持ってもらったり、学習内容を知ってもらったりする。
- 発達段階に応じた子どもへの具体的な関わり方を示した資料を校内で作成し、家庭訪問や懇談会などで保護者に説明する。

<説明資料例>

家庭学習についてのお願い

小学校の学習は、人間形成の基礎となる大切なものです。特に、学習意欲や粘り強く課題に取り組む態度など、家庭学習も含めた学習習慣の確立に当たっては、小学校の低・中学年の時期が重要です。趣旨を御理解いただき、御協力賜りますようお願いいたします。

【家庭学習を通して育てたい子どもの姿】

- 時間を大切に使うことができる。
- 学習習慣を身に付けている。
- 基礎的・基本的な知識・技能を習得している。

【家庭での学習習慣確立のためのポイント】

- 時間や場所を決めて学習させる。
- 子どもの頑張りを認めて言葉を掛ける。

【子どもとの関わり方】

- 話に耳を傾ける。
 - ・うなずきや相づちを返すことで、子どもはうれしくなります。
- 子どもの頑張りを認める。
 - ・自分のしていることを認められることは、何よりの自信になります。
- 子どもの成長に合わせて対応する。
 - ・低学年では、短時間でも保護者の方が直接関わり、やり取りすることによって、学んだことが心に残ります。問題を出し合って答えるなどという方法も楽しいと思います。
 - ・学年が上がるに従って、一人で取り組むことを促し見守るようにしましょう。そうすることで、子どもの主体性が育まれます。子どもが理解度を把握できるように、初めは一緒に見直し、徐々に自分で答え合わせまでさせましょう。振り返る習慣が身に付くと、確実な理解につながります。
 - ・子どものことを気に掛けている姿勢は大切です。言葉は掛け過ぎず、目は掛け続けましょう。

教師や保護者が、適切な場面で温かい言葉を掛けることで、子どもは達成感や分かる喜びなどを味わい、自分で学習しようとする意欲を高めます。

※ 愛媛県教育委員会「家庭学習でステップ・アップ！」が参考になります。

家庭学習のノート展示やノートコンテスト等で、互いの取組を知る機会を作ると、子ども同士が刺激し合いながら、自分なりの工夫を加えて家庭学習に取り組むことも期待できます。

参考資料

愛媛県総合教育センターホームページ

<http://www.esnet.ed.jp/center/>

The screenshot shows the homepage of the Ehime Prefecture Comprehensive Education Center. A callout bubble on the left points to the '学習指導資料のページ' (Learning Guidance Materials Page) section, listing '学習指導案、学習事例 など' (Lesson plans, learning examples, etc.). Another callout bubble on the right points to the '義務教育課' (Compulsory Education Section) section, listing '愛媛学びの森学習支援サイト' (Ehime Learning Forest Learning Support Site).

文部科学省ホームページ

『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/1326947.htm

学びのイノベーション事業実証研究報告書

http://jouhouka.mext.go.jp/school/pdf/manabi_no_innovation_report.pdf

国立教育政策研究所ホームページ

『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryu.html>

授業アイデア例

<http://www.nier.go.jp/jugyourei/>

平成 27 年 3 月発行

分かる 考える 伸びる 授業づくりの基礎・基本
～10のポイント～
目標と指導と評価の一体化を目指して

愛媛県総合教育センター
〒791-1136
愛媛県松山市上野町甲650番地
TEL：089-909-7422（教科教育室）